

よい人生とは
存在の過程であって、
存在の状態ではない

カール・ロジャーズ Carl Rogers
(1902 年～ 1987 年)





その心理学的背景

手法
同調性

前史

1952 年 社会学者兼ジャーナリストのウィリアム・H・ホワイト・ジュニアが術語「集団浅慮」を考案して、「集団の価値がたんに都合の良いものであるばかりでなく、正しく良いものでもあるという立場をとる……合理化された同調性」と定義する。
1955 年 ソロモン・アッシュが同調性への欲望がどれほど意志決定に影響をもたらすかを検討する。
1961 年 ムザファー・シェリフのサマーキャンプに参加した少年の研究が、「内集団」と「外集団」の形成を跡づける。

後史

1963 年 スタンレー・ミルグラムの物議をかもした実験が、主体が権威にしたがう限界をテストする。
1981 年 ビブ・ラタネが、自身の社会的影響理論を展開して、どのようにして諸個人が社会的影響の源泉もしくは的となりうるのかを描きだす。

団結心が強まれば それだけ、集団浅慮の危険も 大きくなる

アーヴィング・ジャニス Irving Janis
(1918 年～ 1990 年)

1952 年にウィリアム・H・ホワイト・ジュニアが考案した「集団浅慮」は、意志決定にあたって集団が正しい結論に到達することよりも同調性により高い価値を置く傾向にあることを示す術語だ。それは広範に認められた現象であったが、心理学者がその研究をはじめたのは、だいぶあとのことだった。それがオーウェルの含意をもつ（ジョージ・オーウェルはディストピア小説『1984』で似たことばを用いた）ことに自覚的であったアーヴィング・ジャニスは、この用語を採択し、その現象の研究のパイオニアとなり、その原因と兆候とを分析した。

アメリカの外交政策決定——具体的には 1961 年の失敗に終わったキューバ侵攻——を例にジャニスは、葛藤を最小限にするために集団がいかにしてろもろの選択肢をきちんと検討せず、ただ合意を得ることに向かうかをあきらかにした。ジャニスの言うところでは、こうした同調性への欲望が、他人に頼らず考えることを、さらには批判的に分析することを妨げ、短絡的な決定へと通じてしまう。

討議や討論といった集団での意志決定に有益なものの存在を知りながらも、グループ内での社会的影響がそれらを危険にさらすことがあるのをジャニスは目の



ジャニスの警告によるなら、あるグループ内の社会的結束と友愛が強まれば強まるほど、集団浅慮の危険も大きくなる。

あたりにした。ジャニスは、集団浅慮へと通じ、創造的思考や討議を押しころしてしまういくつかの特徴を同定したが、なかでもとくに重視されたのが、状況の過酷さと緊急性であった。危機的状況では、同意を得ることがきわめて重要だ。だが、集団浅慮の原因として同じく重要なのは、グループ内部での相互関係とその集団のリーダーシップの性質、それにグループの構成員たちが、自分たちは対等な関係にあると個々に感じて、結束力のある社会ユニットをかたちづくっているかだ。集団浅慮のこうした原因にくわえて、ジャニスはこの罫に陥りがちなグループの典型的な諸特徴をリストアップ

参照 クルト・レヴィン→222～227 頁 ■ ソロモン・アッシュ→228～231 頁 ■ スタンレー・ミルグラム→252～259 頁 ■ フィリップ・ジンバルドー→260～261 頁 ■ ムザファー・シェリフ→343～344 頁

“
集団による意志決定の利点は、
そのメンバーたちが
危機的状況に直面すると、
しばしば失われる。
アーヴィング・ジャニス

”
する。たとえば、自己欺瞞という主要素——とくにグループの見解は全員一致によるという幻想——と、この全員一致による見解はまったく正しく良いという信念がそれだ。道義的な高みにいたったことで、そのグループは自己の判断が正当化されたと思うばかりか、ある程度の無謬性をも獲得した以上どんな警告にたいしても自己の立場をまとめて合理化しようとする。だが、こうした満場一致を維持するために同意から外れるあらゆる企

てには圧力がかけられ、個々の構成員は、不同意よりも自己検閲が必要だと感じる。こうして不同意を示さない「内集団」が登場する。内集団は、自己の同意を壊しかねない批判や情報から身を守るために自分たちとはちがう意見をもったあらゆるグループをライヴァル視したり敵視したりする。そうして内集団の団結心を強化しようとするのだ。

さらなる適用

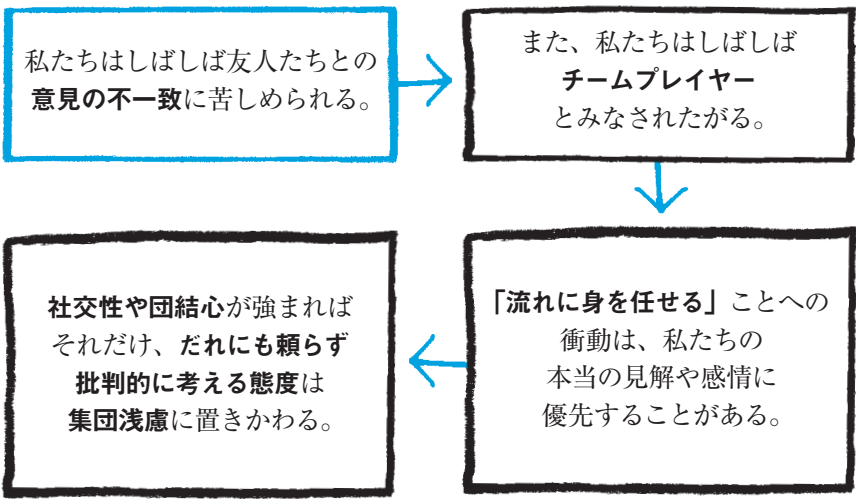
集団浅慮にかんするジャニスの研究は、行政府による意志決定を土台としていたが、企業取締役会や競技スポーツにおけるチームといったほかの多くのグループにも適用可能だ。だが、インターネットとりわけソーシャル・メディアの影響が増大するにつれて、グループの射程も拡大している。フェイスブックやインスタグラム、ティックトックといったプラットフォーム上のグループは、ときに誤った友情感覚を吹きこみ、その結果集団浅慮の諸要素が少なからぬ数のひとに感染して、批判的思考を窒息させ、人びとの意見や態度に悪影響をもたらしている。■

アーヴィング・ジャニス

1918 年、ニューヨーク州バッファローに生まれたアーヴィング・ジャニスは、1939 年にシカゴ大学で学位を取得し、博士号取得のためニューヨークのコロンビア大学に移った。アメリカが第二次世界大戦に参戦すると、ジャニスは徴兵され、自身の心理学の知識を兵士の士気の研究に応用した。戦後はアカデミックな研究をつづけ、1947 年にイエール大学で教鞭をとり、退職するまで在籍した。イエール時代に、ジャニスは主に社会心理学の領野で研究に従事し、意志決定とグループダイナミクスにかんする研究への貢献によって名誉ある賞をいくつも授与された。ジャニスの名をもっとも知らしめたのは、1960 年代に開始された、集団浅慮についての研究だ。1985 年にイエール大学を退職すると、カリフォルニアへ移住し、そこでカリフォルニア大学バークレー校の心理学名誉退職教授に任命された。1990 年、72 歳でカリフォルニア州サンタローザにおいて肺がんで亡くなる。

主著

- 1969 年『人格——ダイナミクスと発達、査定』
- 1972 年『集団浅慮——政策決定と大失敗の心理学的研究』
- 1989 年『リーダーが決断する時——危機管理と意思決定について』





実験者は、みずからの将来の主題にたいする科学的関心とのバランスをとらなければならない

ダイアナ・バウムリンド Diana Baumrind
(1927 年～ 2018 年)

長らく実験は心理学の科学研究に不可欠であった。そこには、動物も人間も被験者としてふくまれる。だが、ジョン・B・ワトソンの人間の赤ん坊を使った、議論的となった実験によって倫理的な関心が呼びさまされて以来、そうした実験のほとんどが動物を用いておこなわれるようになった。

さらに近年では、社会心理学の領域が成長した結果、とくに人間の被験者の参加するばあいの心理学的実験の倫理性が厳しく監視されている。スタンレー・ミルグラムの服従実験とそれにつづくフィリップ・ジンバルドーの有名なスタンフォード監獄実験があきらかにしたのは、そうした実験において人間の被験者が被りうる危険性であり、それを受けてアメリカの臨床心理学者ダイアナ・バウムリンドは、そうした実験の倫理性の検証を先頭に立って推しすすめた。

実施規範

当時複数のガイドラインがつくられていたが、それは研究において動物に「不必要な苦痛」を与えることへ警鐘を鳴らすものであり、人間が被験者のばあいにはもっと複雑な規則が必要になること

は明白であった。バウムリンドの研究によって一連の問題があきらかにされたが、そのなかには同意、詳しく言うならインフォームド・コンセント（情報を与えた上での同意）、さらにはまやかし、参加者の保護、任務報告、秘密保持などがふくまれた。のちに規範化されてゆくこれらの核となる諸原理は、世界中の心理学者からなる専門家協会で採択され、いまでは彼らの実施規範の土台をなしている。この規範は社会的・政治的情勢の変化を反映して、定期的に改訂されている。■

“
被験者たちと実験者とのあいだに
利害の不一致があったなら、
優先されるべきは
被験者たちのそれだ。
R・ローゼンタールと
R・L・ロスナウ

”

参照 ジョン・B・ワトソン→66～71 頁 ■ B・F・スキナー→78～85 頁 ■ スタンレー・ミルグラム→252～259 頁 ■ フィリップ・ジンバルドー→260～261 頁



その心理学的背景

手法
同調性

前史

1935 年 ムザファー・シェリフが、グループ内の人びとはほかの人たちとうまくやってゆくために同調性への必要性を感じていることをあきらかにする。

1951 年 「アッシュ・パラダイム」
として知られている課題のなかで、
ソロモン・アッシュが同調性にたい
する人びとの衝動は当地人たちの知覚
や価値観にさえ優先することがある
のをあきらかにする。

後史

2019 年 オランダ犯罪法執行研究
所による研究が、記録された 219 件
の路上での争いを分析して、ほとん
どすべてのケースにおいて傍観者が
介入していたことをあきらかにする。

非協力的な傍観者 なぜ彼は助けてくれないのか

ビブ・ラタネ Bibb Latané (1937 年～) と
ジョン・M・ダーリー John M. Darley
(1938 年～ 2018 年)

二 ユーロクタイムズ紙によれば、
1964 年のキティ・ジェノヴィーズ
暴行殺害事件では 38 名の目撃
者がいたが、だれひとり助けにはいらな
かった。反応の欠如に誇張のあったこと
がのちにあきらかになったが、この記事
に刺激されて、アメリカの社会心理学者
ビブ・ラタネとジョン・M・ダーリーは「傍
観者効果」の研究に乗りだした。一連の
実験で二人は、参加者を偽装の危機的
状況に置き、彼らがさまざまなシナリオ
にどんなスピードで反応するか——反応
するとしてだが——を観察した。そのシ
ナリオとはたとえば、室内に煙が立ちの
ぼるとか、あきらかに女性が襲われている
ように見えるとかいったものだ。参加
者には、できごとの唯一の目撃者だった
者もいれば、友人と一緒にだった者や、実
験者の共謀者だった者もいた。

ラタネとダーリーが見いだしたのは、
参加者の反応ができごとの性質や緊急
性、さらには必要な行動がどんなものか
に左右されるということだ。さらに、他
人がいあわせるかに影響される面もあっ
た。単独の参加者は、グループでいる者
よりも行動を起こすケースが多く、しか
も素早く反応しがちであった。二人は、



傍観者効果を示唆したのは、事件の目撃者
がひとりだけだったばあいには、集団であっ
たばあい以上に手を差しのべようとするとい
うことであった。

社会的影響の程度の高さにも注目した。
参加者は行動を起こす前に、周囲の人間
の反応をチェックしていた。参加者は、
同調性と集団のまとまりを欲すると同時
に、責任の拡散、すなわち目撃者のひと
りであるばあいには、ほかのだれかが行
動するだろう、という感じを抱いた。

これらの実験によって、ジェノヴィー
ズ事件を通じて露呈した「傍観者の無関
心ぶり」が裏づけられたかに見えたが、
ラタネとダーリーの発見は、傍観者が介
入する傾向がずっと高いことを示すいく
つもの実地研究によって反論を受けた。■

参照 ソロモン・アッシュ→228～231 頁 ■ アーヴィング・ジャニス→234～235 頁 ■ スタンレー・ミルグラム→252～259 頁 ■ ムザファー・シェリフ→343～344 頁